

羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

1. 登場人物紹介 (1)

『羊をめぐる冒険』は、村上春樹らしさでいっぱいです。そこで村上ワールドの物語の構造を考えることにしました。まずは登場人物の紹介です。

登場人物 (1) 僕がはじめて彼女に出会ったのは1969年の秋、僕は20歳で彼女は17歳だった。『寝る女の子』
昔あるところに、誰とでも寝る女の子がいた。それが彼女の名前だ。
1978年7月彼女は26歳で死んだ。

登場人物 (2) それは彼女が離婚したいと言い出した6月の日曜日の午後で、僕は缶ビールのブルリンヴを指にはめて あそんでいた。彼女は彼女の何枚かのスリッパとともに僕の前から永遠に姿を消した。1978.7.24 『離婚妻』

登場人物 (3) 彼女は21歳なほどに完璧な形をした一組の耳を持っていた。彼女は出版社のアルバイトの校正係で、耳専門の広告モデルであり、コールガールでもある。その3つのどれが本職なのか、僕にも彼女にもわからなかった。 『耳のモデル』

この3人の女性は、「羊をめぐる冒険」が開始される<以前>に紹介されています。そして冒険物語に直接関連するのは耳のモデルだけで、他の2人は物語のプロローグですでに死んでいます。<死と離婚>は同値です。

登場人物 (4) 大学時代の唯一の友人だった僕の共同経営者は、1973年には楽しい酔っ払いだったが、1978年の夏には初期のアルコール中毒になっていた。かれは「昔の方が楽しかったし、今は搾取している気がする」と思いながら広告コピーや翻訳業を営んでいる 『相棒』

『相棒』が登場したところから冒険物語が開始されているので、この物語は本来ならば僕の『相棒』の冒険物語になるべきだが、相棒は『相棒』ではなく『耳モデル』に変換されている。理由は、『相棒』が『寝る女の子』(死)と『離婚妻』(離婚)と同様、<過去>の世界に共生したパートナーであり、物語の始めにあたって廃棄(別離)すべき絆なのです。物語の発生には、過去に生きる『相棒』から今に生きる『耳モデル』へのバトンタッチが必要だったのです。

「我々は昔友達だったな」と相棒が言った。
「離婚してほしくなかったんだ」
「知ってるよ」と僕は言った。「でもそろそろ羊の話をしてないか？」
.....(上:P84)

こうして、羊をめぐる冒険の物語が始まる。

羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

1. 登場人物紹介 (2)

- | | | |
|-----------|---|---------|
| 登場人物 (5) | 彼は脳卒中で再起不能の噂が流れている右翼の大物で、敗戦のどさくさに紛れて掴んだ巨富で保守党の派閥と広告業界を買い取り、社会の黒幕として君臨している。なお彼はこの物語でも実際には登場しない。彼はここでも黒幕のまま存在する。 | 『右翼の大物』 |
| 登場人物 (6) | 洗練された不吉なニュースのように突然現れた男は、右翼の大物の秘書で、組織の実質的な経営を任されているナンバー・ツーで、表情がなく黒のスーツを着た背の高い日系二世である。僕は、彼のために拒否権の行使ができないビジネス (= 冒険) を迫られる。 | 『黒服の男』 |
| 登場人物 (7) | 彼はみためよりは人なつっこそうな本物の運転手で、先生 (右翼の大物) を神の次に立派な方と信じている。彼 (のような人) は、僕の冒険の間、僕の年老いた猫の世話をしてくれる。 | 『運転手』 |
| 登場人物 (8) | 妻に「可愛そうな人」と言われた僕の友達で、手紙で二つの頼みをしてきた。一つは過去に関する事で、僕がかつての街に帰ることがあったら2人のひとに「さよなら」を伝えてほしいということ。もう一つは、羊の写真を人目のつくところに発表してほしいということ。 | 『鼠』 |
| 登場人物 (9) | 1963年ベトナム戦争が激しくなった頃、僕の街にきてパーを開いた男やもめ中国人。僕は17歳の無口な高校生の時からこのパーに通い、そこで鼠に出会った。鼠が僕にさよならの伝言を頼んだ人。僕や鼠の青言のルーツがここにある。 | 『ジェイ』 |
| 登場人物 (10) | 1905年仙台の旧士族の甥として生まれ、神童からスーパー・エリートそして農林省に人省。緬羊増産計画大綱をまとめ、現地視察で満州に渡った1935年、行方不明になり、そこで羊と交霊する経験をもち、東亜の農政の中枢から追放される。1937年農林省を辞して北海道に渡り羊飼いになり、敗戦後1947年緬羊協会に勤務する。 | 『羊博士』 |
| 登場人物 (11) | 150センチで猫背で足が曲り、頭から羊の皮をかぶり、羊的なものと人間的なものが同居する。十二滝町の生まれだが、戦争拒否の理由で山中に一人で住む。なぜが鼠の意思を反映したと思われる行動をとる。 | 『羊男』 |
| 登場人物 (12) | 羊をめぐる冒険にでかけるこの物語の主人公で、もうすぐ30歳になる。 | 『僕』 |

この12人は、村上春樹的世界の創造に尽くす使徒なのです。

羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

2. 登場人物のおりなす関係

登場人物がおりなす関係がどのようになっているか、を確定しましょう。

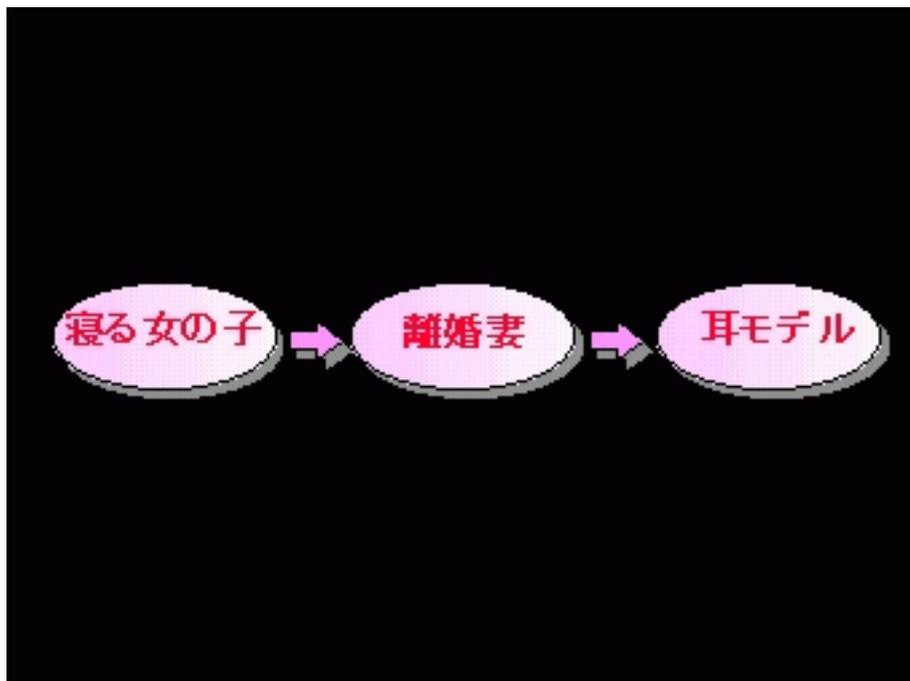
1. 僕をめぐる性的な関係：排他性と完結性
2. 僕をめぐる男友達（＝青春）の関係：共存性と曖昧性
3. 羊をめぐる権力：“ゲーム”と“物語”
4. 羊をめぐる交霊者の悲劇：権力と弱者
5. メディアとしての＜物語環境＞
6. コミュニタス・トラッドの世界
7. ロンリークラウドの世界
8. とまどうハッピー・クエストズの世界
9. メディアとしてのゲーム環境

羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

2-1 《関係1》 僕をめぐる性的な関係 (1)

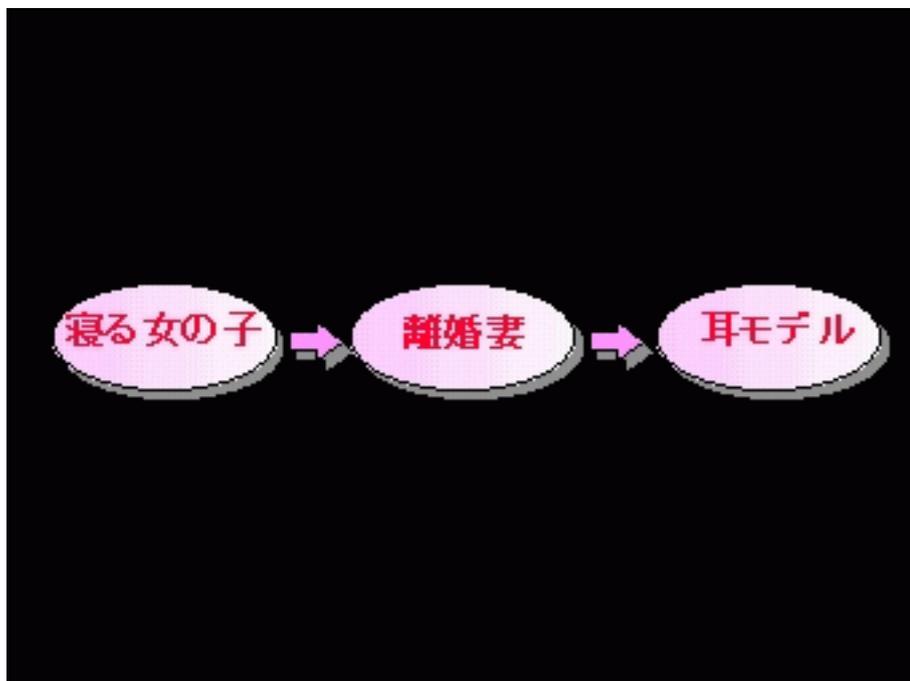
排他性と完結性



物語のプロローグでは、僕をめぐる性的な関係が語られている。女性との身体的な間というもっとも＜濃厚でリアル＞な関係が告白されている。それゆえに、この関係は＜排他的＞にならざるをえず、ある女性との関係が維持されるがぎり、他の女性との関係は成立しない、という原理がみられる。その結果、最初は『誰とでも寝る女の子』との関係が語られ、つぎに彼女の死とオーバーラップして『離婚した妻』とのセックスが暴露され、最後には離婚を契機にして『耳のモデル』との性的関係が成立する、という時間的な経過のなかで排他性の克服が成立するようになっている。

さらにこの3人との関係は、僕との関係ではすべて終焉を迎えている。死と離婚と逃走という形態の違いはあっても、僕と女性の＜性と愛の関係＞は明確な終りを示している。ここでは性的関係の始まりと終りが明示されており、この関係が＜完結＞したものであることを示唆している。

男と女の＜性と愛＞をめぐる関係には、(近代的)所有する観念が強く浸透せざるをえない。『所有』は排他的で完結的な関係を強要するものである。男がある女を愛した(=その女性を所有する)ならば、彼は他のいかなる女性をも愛すことはタブー(ルール違反)であり、また他のいかなる男もその女性を愛すことはタブーである。そして愛が崩壊すれば、また新たな所有をめぐるゲームが展開されるのである。



羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

2 - 1 《関係 1》僕をめぐる性的な関係 (2)

『ノルウェイの森』では所有から距離をとった純愛が語られます。だからこそ、性的関係は歪んでいますし、排他的でもありません。ワタナベ君は、直子さんと緑さんとレイコさんとセックスします。『羊をめぐる冒険』よりも、ラディカルな関係に移行しています。希薄で虚構的で曖昧な共存できる、男と女の性的関係がみえます。

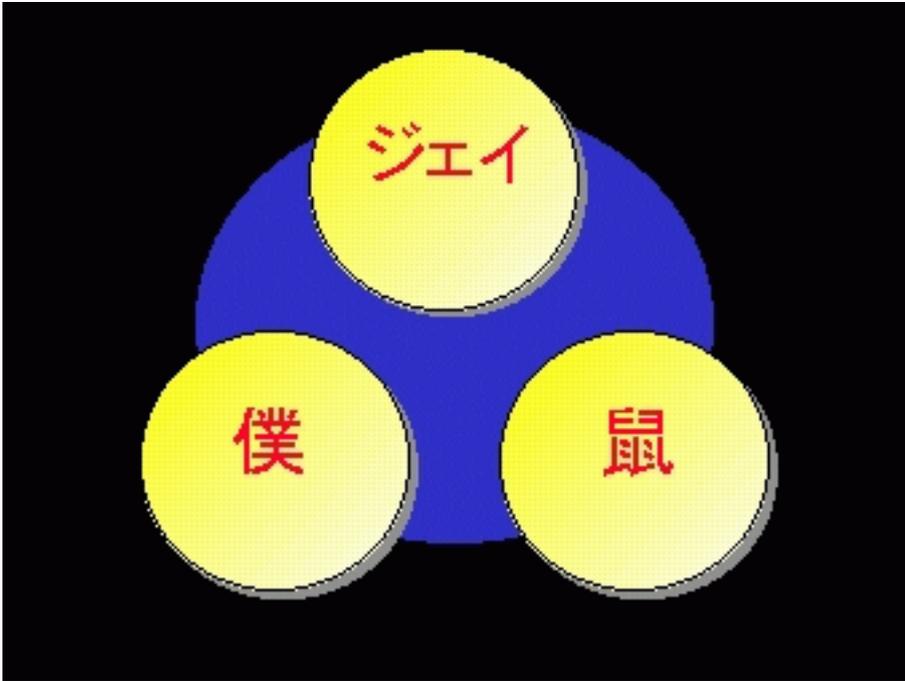
羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

2-2 《関係2》 僕をめぐる男友達 (= 青春) の関係 (1)

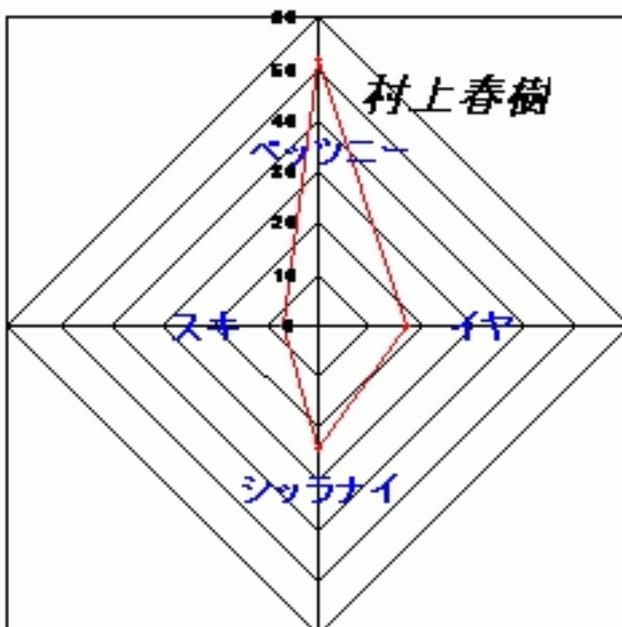
共存性と曖昧性

物語のエピローグでは、僕の性的関係とは対照的な関係が語られている。それは僕と鼠とジェイの懐かしい友情 (青春の思い出) の関係である。



この3人の関係は、強い絆に結ばれた男の真の友情といった「男らしい友人関係」からはもっとも遠い距離にある男の友情である。鼠は2人に「さよなら」も言わずに街を出ていってしまって音信不通であるし、そもそもジェイは僕や鼠と異なった人 (年齢や国籍や生き方) であって、いわゆる友情を共有する資格すら危うい人だし、僕にしてもジェイズ・バーのカウンターでビールを飲んでいけば「それだけでいい」という人で、友情へのこだわりなど気色悪がるだけである。

このように、この3人の友情は<希薄>であり、完全にリアリティ感に欠けた偽物っぽい<虚構性>が目立つ。『嵐の歌を聴け』といわれれば、聴けそうな感じがするほど、気分だけで成り立つ細やかな関係である。さらに、物語のなかで獲得した大金の小切手をジェイに渡して、いつ来るとも知れないジェイズ・バーの共同経営者に死んだ鼠と一緒になろう、という完全に虚構的な関係に酔うことも忘れない。その結果、ここですべてのことが<共存>することが可能で、排他的になることもなく、またいつ終るとも確定できない<曖昧>で永続的な関係が維持される。死んでしまった鼠が永遠に生きられるのもこの関係においてのみである。

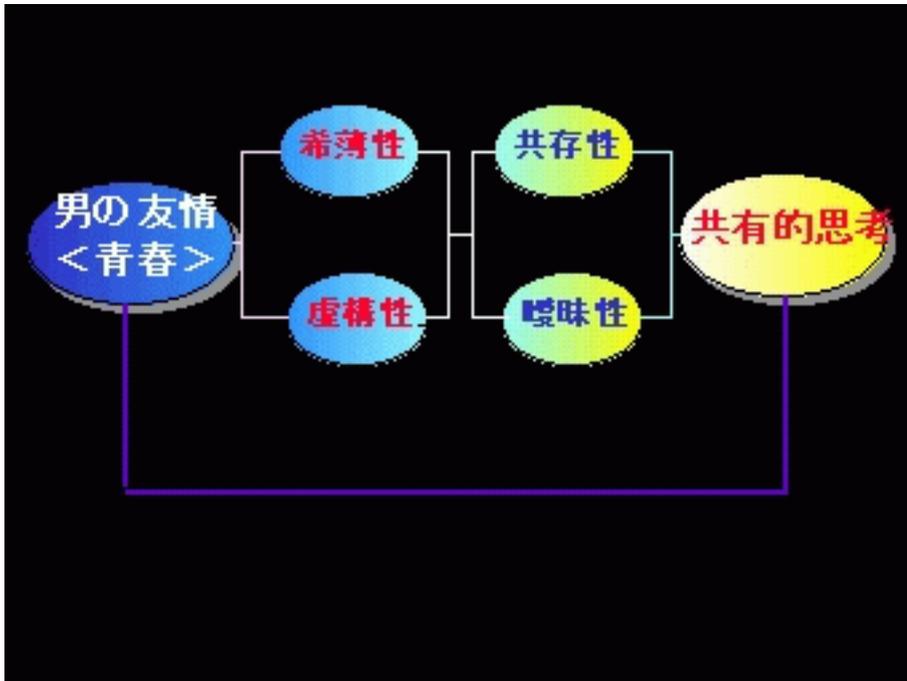


羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

2-2 《関係2》 僕をめぐる男友達 (= 青春) の関係 (2)

このような関係が近代的 = 私的所有から離れることで成立することは、3人の女性との性的関係との対照性を想定すれば、容易に理解可能であろう。『共有』する考え方を優先する時、友情は永遠の輝きをもつ。それが僕たちの『青春』なのだろう。



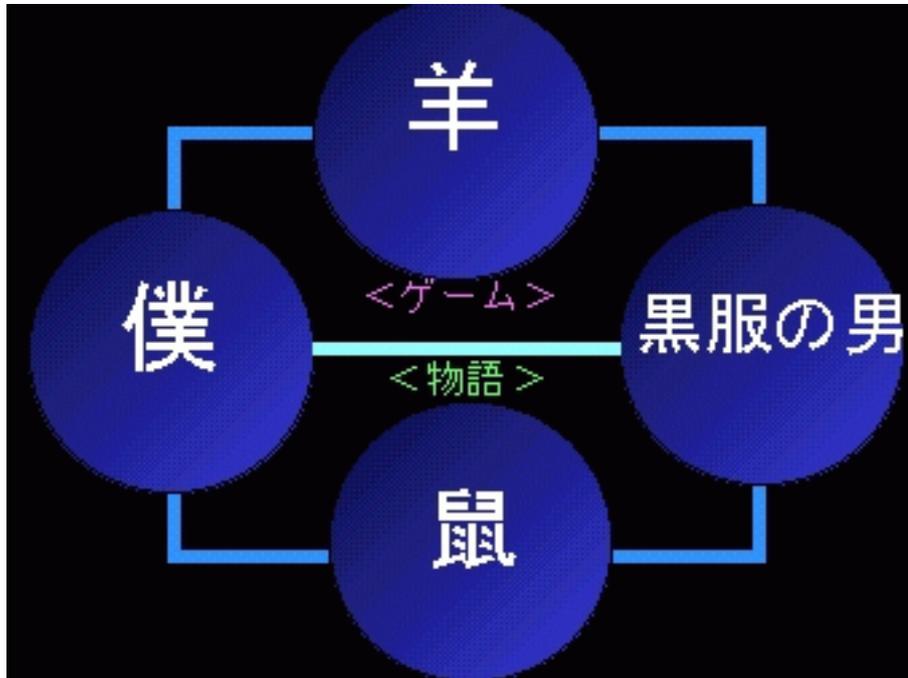
羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

2-3 《関係3》 羊をめぐる権力

“ゲーム”と“物語”

この冒険の最大のテーマは、黒服の男と僕のゲームである。この冒険では、僕は黒服の男とのゲームに勝ったのか、負けたのか、が一つのテーマである。そして、僕は勝った。



僕は黒服の男にたいして弱者である。僕は黒服の男によって否定なしに羊探しの冒険に出発させられ、羊を探し当てるまで黒服の男に操られていた点で、最終局面まで彼の誘導策に翻弄されており、このかぎりでは僕はまさに弱者そのものである。だが権力ゲームである。黒服の男は、「もしも私の言うことを聞かないと、君の命はどうなるかわからないよ」と言うだけで、僕を思いどおりに操作する権力者である。

しかし最後の場面で、僕が黒服の男の策略の意図を理解しえた時、幸運（不運？）にも（羊<最高の権力者>である鼠<典型的な弱者>が、羊を殺すために自殺をする）、どんでんがえしが起こる。その結果、黒服の男は念願の羊を獲得することなく、しかも鼠（&僕）によって殺されてしまうのにたいして、僕は黒服の男から高額の小切手を獲得し、またゲーム中に預けておいた猫の“いわし”を丸々と太らせてもらって返して貰う。僕は、鼠の支援を受けて権力ゲームの勝者になる。

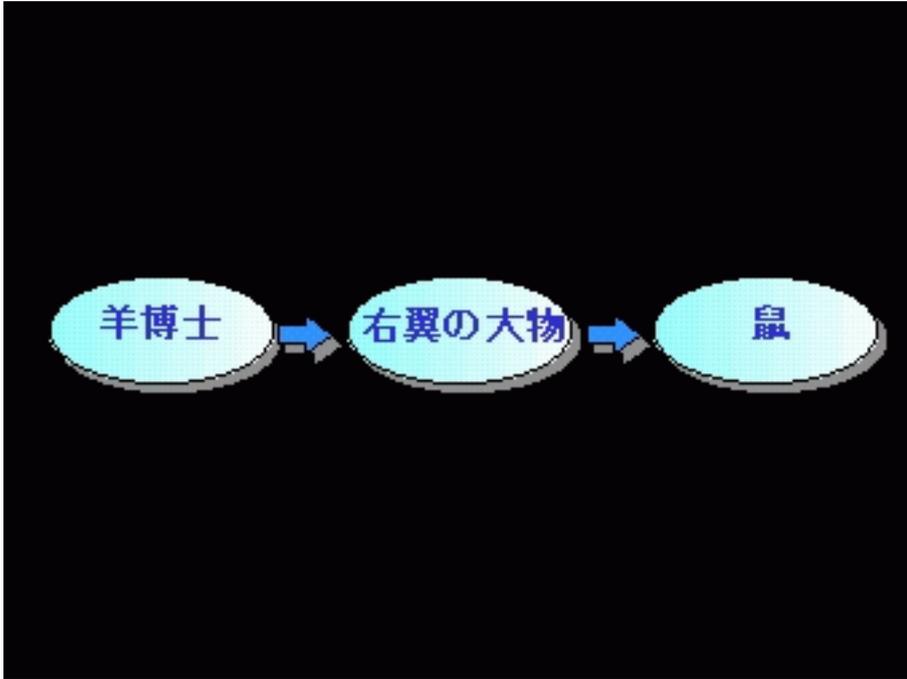
弱者が強者に勝つ、という僕の権力ゲームでの幸運が発生した瞬間から、この権力ゲームは反権力物語に転換する。つまり確率として黒服の男が簡単に勝つはずの権力ゲームから、<最後は、善なる弱者が勝利すべきだ>という反権力物語への移行が行われる。だからこそ、それは基本的には冒険ゲームではなく、冒険物語なのである。さらに弱者が勝利するには、それなりの代償が必要であり、それが友人の鼠を永遠に失うという僕の青春物語の不幸（犠牲）である。この不幸・犠牲・代償を提示することで、<弱者がゲームに勝つ>というゲームの原則が正当化され、その結果ゲームと物語がもつ<ねじれ>（強者が勝つはず、しがし弱者が勝つべきだ）にたいして、バランスがとられるのである。僕と黒服の男のゲームに、【羊 = 鼠】が示す両義的な役割が重要である。

羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

2-4 《関係4》 羊をめぐる交霊者の悲劇

権力と弱者



背中に星形の波紋をもつ羊と<交霊する関係>をもった3人の弱者の物語は、羊をめぐる冒険の重要なサブテーマである。

1935年の夏、羊博士が満州国境近くで放牧の調査中に道に迷い、偶然目についた洞窟で一夜を過ごしたとき、夢の中に羊が現れ、「わたし(羊博士)の中に入れてもいいか」と尋ね、そこから<羊の冒険>がはじまる。

羊の目的は、人間と人間の世界を一変させてしまうような巨大な計画(=アナーキーな観念の王国の建設)であった。羊はその目的のために、羊博士を輸送機関として利用して日本に上陸し、そこで利用価値のなくなった羊博士を捨て(博士は『羊抜け』になる)、すぐに獄中の右翼の青年の体内に入り、かれに今度は巨大な組織を築き上げさせた。その結果かれは右翼の大物として財政界に強い情報ネットワークをもち、闇の権力者の地位を獲得した。しかしかれの使命はそこまでであった。羊は巨大な権力機構が完成したところで、右翼の大物が『羊抜け』をし、大物は死の瀬戸際にたたされてしまった。最後に、羊はその権力機構を操る人間を探した。それが鼠である。羊は、鼠を利用して、あらゆる対立が一体化し、その中心に羊と鼠がいる完全にアナーキーな観念の王国を完成しようとした。しかし羊の野望は、鼠の自殺によって最後のところで挫折する。

なぜ鼠は自殺したのか。「キーポイントは弱さなんだ。道徳的な弱さ、意識の弱さ、存在そのものの弱さ、全ての弱さ。本当の弱さというものは本当の強さと同じくらい稀なものなんだ。たえまなく暗闇にひきづりこまれていく弱さが実際に世の中に存在するのさ。俺は俺の弱さが好きなんだ。夏の光や風の匂いや蝉の声や、そんなものが好きなんだ」と鼠は言った。鼠は、羊によって、自分の弱さが権力に一体化してしまうアナーキーな世界を恐れて、羊に完全に支配される直前に、羊が寝込むのを待ってから台所のはりにロープを結んで首を吊った。それは鼠に残された最後のチャンスだった。

「君はもう死んでいるんだろう？」
「そうだよ」と鼠は静かに言った。「僕は死んだよ」

羊をめぐる冒険は、表では僕の冒険であるが、裏では羊の目的を破壊する鼠のアドベンチャー・ゲームでもある。鼠は、僕と同じように、弱者であるにもかかわらず、権力ゲームの土壇場で逆転して勝者になる。そのときゲームはドラマになる。逆転ホームランがゲームを超えた感動を与えるように、鼠は自爆することで冷静な権力ゲームを感動的なドラマに仕立て上げる。その瞬間、羊博士と右翼の大物にみられた交霊者の羊抜けの負けのゲーム、哀しい悲劇として完成する。鼠は舞台裏の主演である。

羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

2-5 《関係5》メディアとしての〈物語環境〉

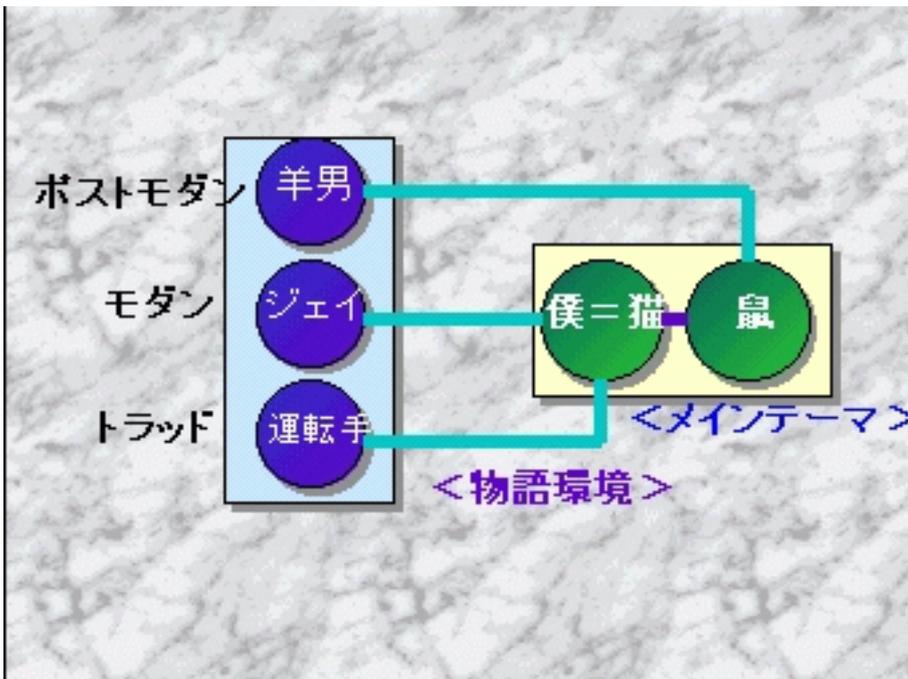
物語には、脇役がいなければなりません。主役だけでは、ドラマにふくらみができません。この物語では、運転手と羊男とジェイが、大切な人です。

僕は、冒険を始めるにあたって、運転手に猫を預けます。僕は、僕がこだわる唯一の所有物ですから、猫の世話をみてくれる人がいないかぎり、僕は冒険に旅立つことはできません。そのとき運転手が登場します。運転手は、羊をめぐる冒険物語をはじめる前提条件を整備する上で不可欠な存在です。

運転手は、黒幕の先生を尊敬し、黒服の男の下で実直に働きます。ここでは、支配と服従の政治的関係と畏敬と甘えの情緒的關係がステレオタイプ的に表現されており、伝統的な世界が鮮明に描かれています。羊男は、物語のクライマックスで僕が鼠に出会うメディアとして重要な役割を果たします。鼠は羊男のふりを借用して、僕に会います。羊男は羊男でありながら、鼠であることで、僕にとってももっとも重要な脇役を演じます。羊男は両義的な存在をなさげなく演じることで、新しい世界の到来を暗示します。

最後に、ジェイです。かれは、60年代のモダンを体現した人です。僕がもっとも安らぎを感じることができる関係がそこでは成立しています。無理することなく、自然に自分の身体に馴染む世界を提供するのがジェイです。物語の最後に、僕はジェイのところに戻り、鼠と3人の友情を確認する儀式を済ませ、そしてそこから去ってゆきます。それが僕の青春の完結なのです。ジェイは、この物語それ自体を操る司祭です。僕は、ジェイにつながる時に「さよなら」を言うために、鼠にこだわり、鼠を失ったのです。これは、だがら徹底したレトロな青春物語です。

運転手・羊男そしてジェイは僕の物語を誘導するメディアです。僕は、この3人との間で生成される〈環境〉のなかで、物語を展開させていきます。トラッドな運転手の世界と、モダンなジェイの世界と、そして奇妙な動きを示す羊男のややポストモダン的な世界という、3つの世界の重層的な共鳴関係のもとで、僕は「鼠を追い掛ける猫 = 僕」の関係を物語に仕立て上げます。



羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

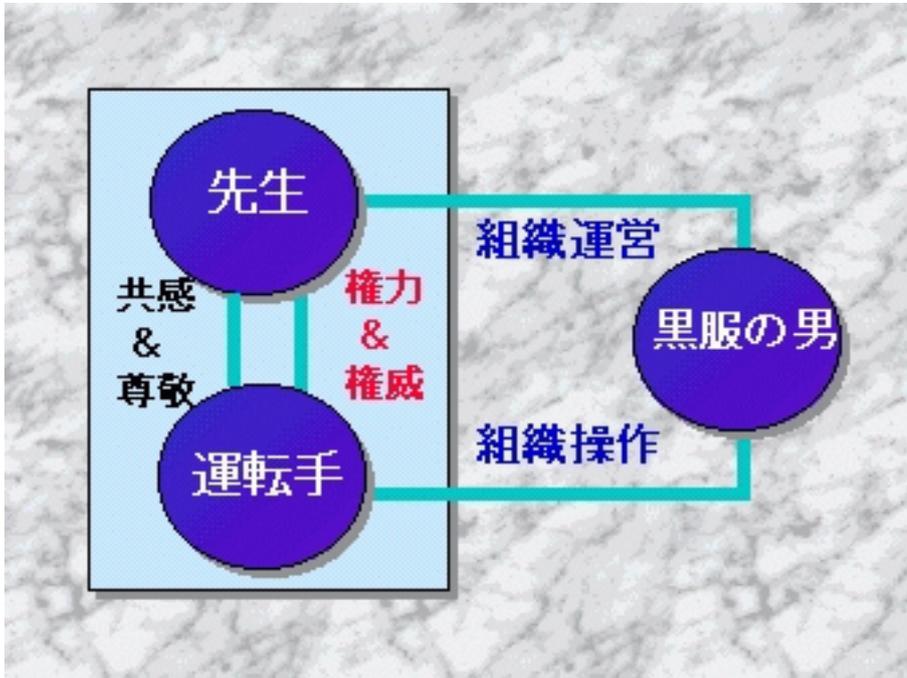
2-6 《関係6》 コミュニタス・トラッドの世界

運転手と先生（右翼の大物）と黒服の男は、この物語のトラッド環境に生きるメディアです。外部社会からは＜右翼の大物＞と恐れられている人物も、このトラッドな世界では＜先生＞として運転手たちから共感され尊敬されます。

先生は絶対的かつ包括的な権力者であるがゆえに、また権力者としてのパワーを十分に発揮してきたがゆえに、下からは強い共感をもって全面的な信頼と尊敬がもたらされます。先生には、失敗はありません。たとえ失敗したとしても、その責任はすべて部下が背負うものです。ですから先生の威信と権威は傷つくことはなく、永遠に不滅な存在としてトラッドな世界に君臨します。

運転手はこの世界の安定と安全を体現するメディアです。自分のおかれた社会的な位置を素直に疑うことなく全面的に受け入れるかぎり、身も心も安定しています。僕が運転手とかわす会話には、運転手への温かい共感の意思がみられます。伝統的な社会の善とは何か、その精神を滲ませる運転手には、僕も共感せざるをえないのです。

運転手（そして先生）とは対照的に、黒服の男はこの世界を組織・運営する役割を担わせるだけ、ダーティで損な存在（悪役）として描かれます。その悪役は、その行動が権力（先生）の運営と大衆（運転手）の操作という、きわめてモダンな性格をもつがゆえに、貼られたレッテルなのです。つまり黒服の男はこのトラッドな世界ではフリークであるために、悪役にならざるをえません。この世界では、ピュア・トラッドの運転手と先生は善玉であり、モダンすぎる不純な男は悪玉なのです。



このような環境のなかで、先生と黒服の男は死に、運転手だけが残ります。この物語は、トラッドな世界は最後には破壊されるように構造化されています。僕が黒服の男とのゲームに勝つとき、それはトラッドのメディア環境の死を意味します。

羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

2-7 《関係7》 ロンリークラウドの世界

モダンであることを自覚し、だからこそそこから逃げたいと願望しながら、まだモダンにこだわりをもって生きている集団が、“逸脱するモダン”のメディア環境です。この環境に生きる登場人物は、<相棒と鼠とジェイ>、そして僕である。

かれらはモダンに典型的な“組織人”としての行動ができず、組織のおこぼれをもらって生活する社会的な逸脱者です。かれらは、しかもそのことをしっかりと自覚しており、しかもその自覚に、やや歪んではいるが、それなりの自負をもってします。かれらには、「真面目に、無駄なく、我慢して、大きく」生きることが素直に素晴らしい人生だとはもはや思えません。「がむしゃらに前進あるのみ」という思考には、どこかで戸惑うものを感知する恥じらいのセンサーがあったのか（僕）、それとも豊かさをすでに子供のときに経験してしまったからなのか（鼠）、それとも前進を阻まれた苦い体験から逃げるだけなのか（たぶん相棒）、それとも前進する資格すら与えられないからなのか（ジェイ）、その理由はさまざまではあっても、「ただ前進のみ」を強要するモダンの精神には疲れを感じたのでしょうか。「もう逸脱のレットルでもなんでも勝手に貼ってくれ」と、少し情けない声をだして虚勢を張るのが僕であり、3人の友人です。

この物語は「青春にさようなら」がテーマだから、本来ならば、その決別は大人になるとを意味するはずですが。「もう大人なんだから、髪を切ってまともな組織人（そしてまともな家庭人）になろう」ということなのに、かれらの決別はモダンへの恭順の誓いにはなっていません。

鼠は、死を選び
相棒は、酒に潰れ
ジェイは、永遠にバーにこだわる

永遠の青春が夢に過ぎず、だからモダンの世界に大人となって参加しなければならないのに、そうしたくない場合どうすればいいのか、この3人が教えてくれます。

青春を永遠にするには夢の世界に封じ込めることです。鼠はそうして死を選びました。

現実的な対応戦略としては、一時的なモラトリアムを採用することです。妻子を養わなければならない現実を抱えた人には、これはかなり有効です。相棒のアルコールの戦略は賢明な策です。ただしこの戦略も中毒化の危険があるので、注意が必要でしょう。

現実的でかつ永続的な対策を望むならば、モダンの陰を探ることです。ジェイの戦略がこれです。ジェイは、夜の裏世界に潜むバーの経営者であることに満足することで、モダンの逸脱者（ロンリー・クラウド）として生きることが許されます。

そして僕は、ダンス・ダンス・ダンスを続けます

羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダンティをめぐるシンボリック・アナリシス

2-8 《関係8》とまどうハッピー・クエスターズの世界

モダンそのものにサ ナラを言ったのが、羊博士と羊男です。この二人では落ち着きが悪いので、『ダンス・ダンス・ダンス』からもう一人借用します。それは、耳のモデルを殺した五反田くんです。

モダンを無視して生きるのが、この3人です。

羊博士は今ならば元祖オタクで、羊抜け後の博士は、モダンからすれば完全に降りたすが、その視点を無視すれば、膨大な知識をもって無意味な世界を探求する巨人です。羊博士は、知的な世界での常識では無視されても、その常識自体を疑うことができる人からすれば、恐ろしいまでの知的パワーを発揮する、天才バカという両義的な存在です。

羊男も両義的です。羊と人間という2つの存在を同居させています。かれも世間の常識から無視されて生きています。かれには、戦争回運のためにそうなったというかなり生々噂がありますが、それを無視すると、浮浪仙人のような生き方をしています。都会にいれば汚い浮浪者のような風貌なのに、厳しい自然環境に生きることなぜが仙人のような悟った高潔さを漂わし、人間でありながら羊でもあることに矛盾を感じない男ノ牡です。だからこそ、羊男は鼠に自分の身体を貸す（いわば恐山のいたこ）ということまでできたのでしょう。物語のクライマックスである僕と鼠の出会いのシーンで、羊男が果たした役割は決定的に重要です。

かれらは、とまどうのだ
かれらは、ハッピーなんだ
かれらは、クエスターなのだ

かれらは世の中から逃走する。組織とも核家族とも縁を切って、自分の世界にこもる。それしか生きる方法はない、という絶望を背負いながら、あっけらかんとする潔さをもって、かれらは自分だけの閉塞的な世界を愛する。だから、外部との接触には戸惑いながら、あくまでも無関心を装い、閉塞的な完結性の世界では無意味な探究に凝り、満足する自分に安心する。

僕は、世界のおわりに憧れる
僕は、ハードボイルド・ワンダーランドの世界に疲れる
僕は、とまどうハッピー・クエスター “ のようなもの ” である

でも、僕は羊男ではないし、羊博士でもないし、五反田くんでもない。僕は、僕でしかないことで、物語を語らざるをえない。それが、僕の『羊をめぐる冒険』なのだ。

羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

2-9 《関係9》メディアとしてのゲーム環境

『羊をめぐる冒険』の〈冒険〉には、物語とゲームがあります。物語としては、僕は耳のモデルと一緒に、鼠を探するという青春物語を創造します。これにたいして、ゲームとしては、僕は、羊 (= 鼠) と獲得するという権力ゲームを展開します。

僕にとってのゲーム環境という視点からみると、その用意をした相棒と黒服の男が重要です。相棒は、実際にはゲームに参加しません。かれの代わりに、耳のモデルが僕と一緒に羊探しをします。そしてその耳のモデルを『ダンス・ダンス・ダンス』のなかで殺したのが五反田くんなので、ここでも五反田くんに参加してもらいます。

なにしろこの冒険では“3”が隠された記号なんです。

相棒は、僕を耳のモデルに合わせる.....メディアです。
黒服の男は、僕に鼠を探させる.....メディアです。
五反田くんは、僕に耳のモデルを探させる.....メディアです。

本来ならば、僕は相棒と一緒に鼠を探すべきなのでしょうが、これでは男ばかりになってしまって物語としてはつまらなくなるので、相棒に代わる女性が必要だったのです。では女性ならば誰がよいのかというと、相棒との意味的に〈同型性〉の基準からすれば、妻が最適なのでしょうが、これではあまりにも物語としての「ふくらみ」に欠けるので、妻と僕との関係に離婚という状況を設定することで、妻の登場場面をなくしたのです。ですから耳のモデルの登場には、相棒に関係しながら、相棒とは異なった意味をもつ女性という条件が必要だったのです。

しかし耳のモデルは、この冒険の最大のクライマックスでは排除されてしまいます。その直前までは僕と一体化して主役を演じていたのに、僕と鼠が再会するクライマックスになると、彼女は邪魔者としてあっさり切り捨てられます。でもよく考えると、それは当然です。僕と鼠の関係は、基本的にはジェイや妻が相棒に共振する意味世界を背景にもつので、耳のモデルがいたのでは、意味の論理が通らないのです。彼女はあくまでも脇役なのです。つまり彼女の排除によって、相棒と僕が鼠を探するという基本パターンに戻るのです。それではあまりにも耳のモデルが可哀相ではないがというので、その後に耳のモデルを探す『ダンス・ダンス・ダンス』が書かれたのでしょう。ここでは、鼠から耳のモデルにクエストの対象が変化していますが、〈クエストと死〉のテーマは共有されており、違いは登場人物の世界の中心をロンリー・クラウドからハッピー・クエスターズの世界にシフトさせただけです。その結果、ここでは僕と五反田くんの関係が、僕と相棒の関係から〈変換〉され、しかも構造としては〈継承〉されています。

羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

3. 《構造分析》離婚・青春・セックス・権力 (1)

『羊をめぐる冒険』におけるさまざまな関係をみせてきました。このような関係を構造化して解釈すると、どうなるのでしょうか。

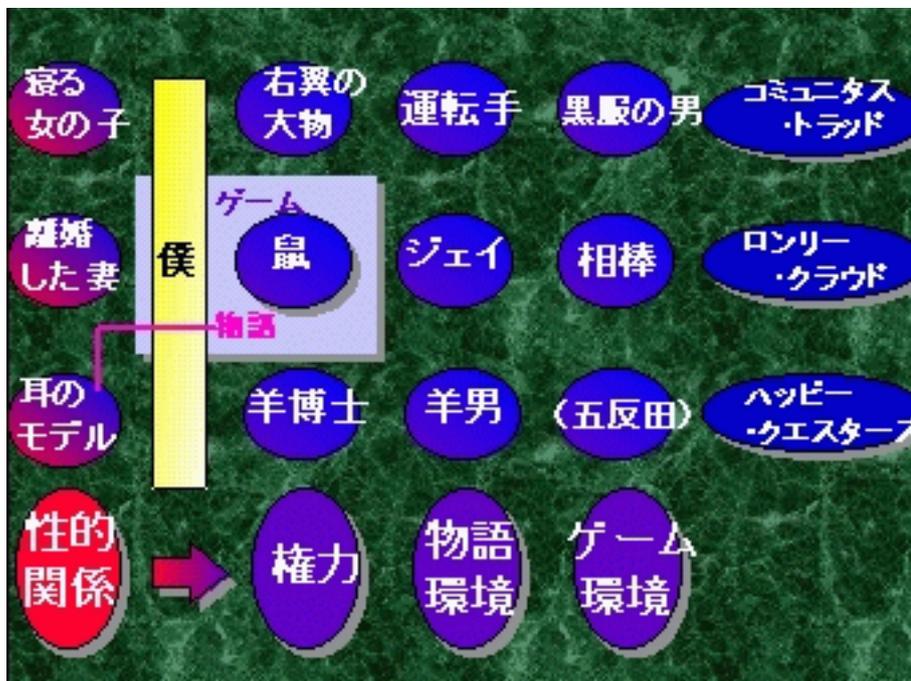
<モダンからのズレ>という構造化の視点が発見できます。この物語のすべての登場人物がモダンであることから逸脱しています。そのズレは、しかし三様です。

コミュニタス・トラッドは、そもそもモダンの発想を解釈する視点をもちません。先生と運転手のセットは、その典型です。

ロンリー・クラウドは、モダンの視線を理解しているからこそ、モダンからの視線に辛い思いをします。ストレートな生き方がモダンのあるべき姿と知りながら、蛇行しかできないロンリー・クラウドは、どこかに痛みをもって生きていかねばなりません。僕と鼠、妻と相棒、そしてジェイは、いつも“はずれ”意識をもっています。

とまどうハッピー・クエスターズは、僕たちに較べると、あっけらかんとしています。かれらにモダンかの逃走に恥じらひはありません。逃げることに平然としています。その強さは僕たちには羨ましいものでしょう。

こうして、構造がきまります。



では、モダンからのズレとは、何なのか。それは性的関係と権力関係、俗にはセックスと暴力です。モダンの世界ではルールの基本的精神は禁欲と理性であり、セックスと暴力はタブーです。家庭と仕事、そこでの妻と夫は娼婦とヤクザではありません。

夫は、一人の妻を永遠に愛し、
妻も、一人の夫を永遠に愛す。
主人は、仕事に全精力を傾け、
主婦は、家庭の維持に努める。
父は、知の神として範をなし、
母は、鬼になって青兎をなす。
男は、権力よりも機能を信じ、
女は、性愛よりも情愛を好む。

羊をめぐる冒険をめぐる解釈

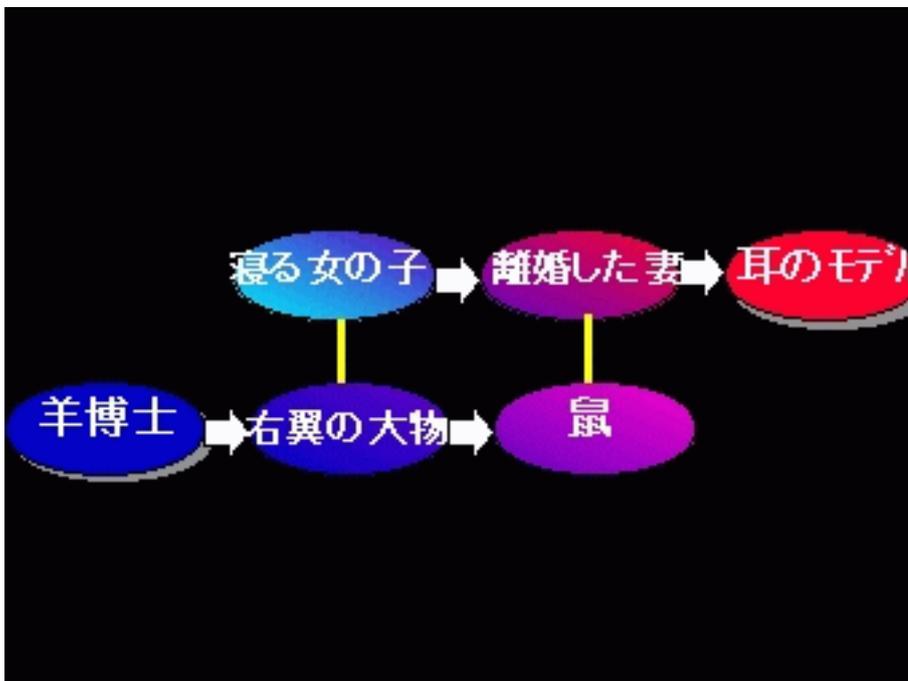
僕 = 村上書樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

3. 《構造分析》離婚・青春・セックス・権力 (2)

『羊をめぐる冒険』の構造的テーマは、セックスと権力の話です。プロログで語られた僕と3人の女性（寝る女 離婚した妻 耳のモデル）の性的関係の話は、変換されて、権力（星斑の羊）をめぐるゲームと物語として展開されます。つまり性的関係と権力関係は構造的には同型であり、3人の女性をめぐる話と全く同じことが、男の世界に変換されて、繰り返して語られているのです。男と女の関係におけるセックスと、男同士の関係における暴力的権力とは、ともにモダンの世界ではタブーなのです。

しかもここでのセックス話の告白は、一夫一婦制の否定（誰とでも寝る女 / 不倫に走る女 / コールガール）を自明としており、語り口のまるやがさとは対照的に、モダンの時代精神への激しい嫌悪を表明しています。

同じように、権力関係のゲームと物語でも、競争者であり、悪役でもある「黒服の男」はインテリ・ヤクザそのもので、右翼の大物はヤクザのドンです。その戯画化された表現は、権力関係がモダンからいかにズレたものであるか、を理解しやすくするための操作なのでしょう。羊博士から右翼の大物そして鼠への権力そのものの移行は、権力関係がいかにモダンの時代精神からずれているかを示すものです。もっともこの権力の移行の順序は、性的関係の発生順序と異なっています。



構造的には、このような移行が循環するものだとすれば、近未来的な耳のモデルと戦前の羊博士との時間のズレは問題ではありません。両者は、同型なんです。

離婚と青春、これが最後の切り札です。

性的関係を暴露した3人の女性のなかで、もっとも重要なのは離婚した妻です。耳のモデルはメイン・ストリートにも登場するので、彼女との関係がもっとも重要なのかな、と思わせますが、彼女はカモフラージュにすぎません。その証拠に、彼女は『ダンス・ダンス・ダンス』の主人公なんです。ここでは、<僕と妻>の関係がテーマです。

なぜ、僕と妻の結婚生活は失敗したのか。その謎を解くために、メイン・ストーリーにおいて僕は冒険を強要され、クライマックスで僕が鼠に再会するシーンでは鼠の死が無情にも設定されているのです。

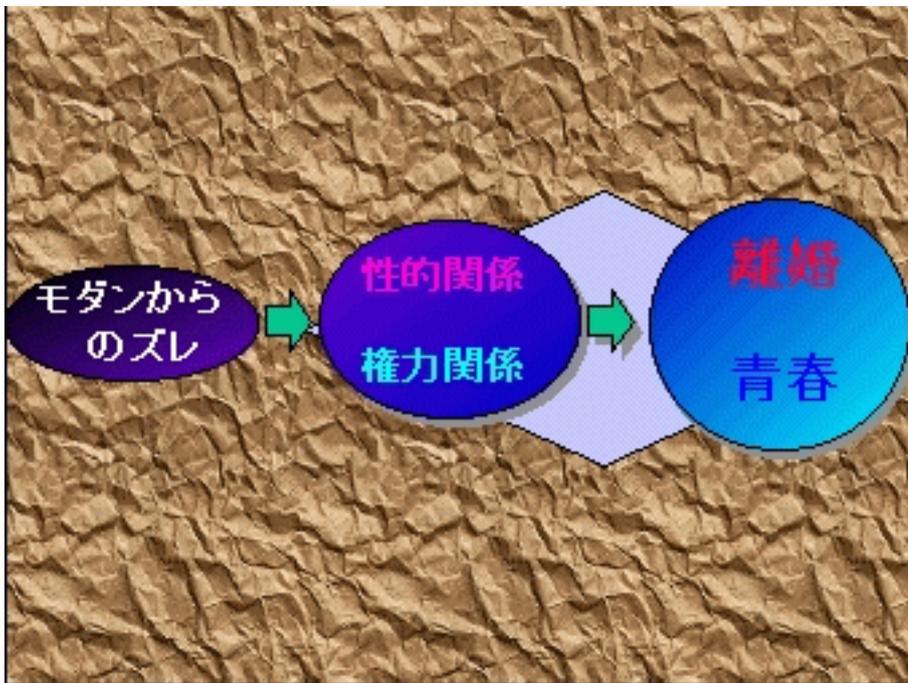
僕は、妻との結婚についに失敗した。
僕は、鼠との青春に封じ込められた。

羊をめぐる冒険をめぐる解釈

僕 = 村上春樹のモダニティをめぐるシンボリック・アナリシス

3. 《構造分析》離婚・青春・セックス・権力 (3)

セックスと権力のストーリーという大きな流れのなかで、さらにそれに共振する構造テーマとして、《離婚と青春》があります。



永遠の青春に封じ込められるとき、僕には「大人になる」分別がなくなります。組織人として真面目に働き、結婚して健全な家庭を築こうとする「大人らしさ」がなくなります。だから30歳近くなっても、鼠との再会を求める子供っぽい冒険が開始されるのですし、同時に離婚という事態も発生するのです。青春へのこだわりは、真面目に・無駄なく・我慢して・大きく生きることを拒絶します。だから核家庭は崩壊し、無意味な子供じみた冒険が展開されるのです。

『羊をめぐる冒険』は、永遠の青春物語だからこそ、離婚という悲劇（モダンの価値基準から判断すれば！）を呼ぶのです。とすると、離婚と青春へのこだわりは構造的には同型なんです。

村上春樹は、とても危険な作家です。